《書　評》

山田豪一著　汲古書院

『満洲国の阿片専売
——「わが満蒙の特殊権益」の研究』

（愛知大学）森　久男

日本の植民地経営史，占領地統治論において，阿片が重要な役割を果たしてきたことは夙に知られており，各種の刊行物で折に触れて論究されているが，その考察は概して局部的であるか，あるいは一面的で，その実態を体系的に論じた著作はあまり多くない。今回，山田豪一氏が出版した新著『満洲国の阿片専売—「わが満蒙の特殊権益」の研究』は，日露戦争後から日中戦争初期にかけての満蒙地方について，とくに満州国のアヘン専売を主要な考察対象として，日本の満蒙支配と阿片との複雑で錯綜した関係を詳細に論じている。本書の本文の総頁数は927頁で，序章だけでも142頁に及んでいる。

本書の編別構成は次のとおりである。

序　章　満洲国阿片専売前史
第一章　満洲国財政と阿片専売
第二章　満洲国建国公債
第三章　阿片専売事始
第四章　熱河侵攻
第五章　密売との抗争
第六章　関東庁を潰す——在満機構改革とは
第七章　阿片専売の声あがる
第八章　蔣介石の六年禁絶計画の挫折
第九章　北満と熱河の罌粟栽培
第十章　一九三七年，転換点に立つ

序章では，「わが満蒙の特殊権益」の原型が考察される。すなわち，日露戦争後に関東州で施行された阿片専売制に焦点を合わせて，日本の満蒙の特殊権益が関東州から満鉄附属地を通じて満蒙一帯へと拡大していく様相を考察し，国際阿片条約の制約下で，関東庁が財政上の必要性から阿片収入を主要財源と見なし，満州各地，華北へ阿片・麻薬の密輸が浸透していく状況が描かれる。

第一～三章では，満州国建国から阿片専売実施にいたる過程を考察している。第一章は，満州国建国史を財政政策の側面から検証し，増大する支出を賄う財源として阿片専売収入が早期に着目されながら，日本人・朝鮮人の阿片密輸，原料阿片確保難から専売制の実施に齟齬が生じた事情を分析している。第二章は，満州国大同元年度予算の編成過程で，不足する財源を賄うため，阿片禁止の国際世論に逆らいながら，阿片専売収入を担保として，日本国内で満州国建国公債が発行される経緯を解明している。第三章は，1932年末に専売公署が発足し，翌年1月に阿片法が公布されたが，専売機構整備の遅延，阿片集荷の不成績，小売人指定の難航から，大同元年度の阿片専売成績が極めて不良に終わった理由を分析している。

第四章では，熱河作戦・華北侵攻作戦と並行して，熱河省に満州国の新行政機構が施行されていく経緯を，湯玉麟の熱河禁煙善後管理局の接収過程に焦点を合わせて解明し，熱河阿片の接収によって阿片専売の原料基盤が確立したことが検証されている。

第五～六章では，「わが満蒙の特殊権益」と満州国阿片制度の矛盾が考察されている。第五章は，専売局による専売収益独占に反発した市県旗の警察が阿片密売の取締りを怠って，専売阿片の小売人指定が難航するとともに，関東庁の専売阿片が満鉄附属地を通じて満州国に流入したが，満州国が日本人・朝鮮人の阿片・麻薬密輸を取り締まれず，関東庁が満州国にとってすでに有害無益の存在に転化していた状況を解明している。第六章は，満鉄瓦房店駅での密輸摘発事件を契機として，関東軍が関東庁を追い詰め，1934年の在満機構改革を通じて，関東庁が廃止されていく過程を分析している。すなわち，関東庁廃止・満鉄附属地返

還・治外法権撤廃の結果，日本人・朝鮮人に満州国の法令が適用され，満州国の統一的な統治システムが完成していく経緯，および阿片専売の基礎が確立するにいたる過程を解明している。

第七章では，1935年から専売阿片の指定小売人，阿片吸飲登録者が急増したことに対して，中国人大官が民族絶滅の危機意識を抱き，1936年末に阿片専売反対に動き出す経緯を解明している。

第八章は，関東軍の華北分離工作の下で，国民政府の六年阿片禁絶計画が挫折を余儀なくされる過程を，大連経由の対中国密輸出，梅津・何応欽協定，リース・ロスの幣制改革，冀東特殊貿易の意味を考察しながら解明している。

第九章では，満州国の阿片原料の国内供給基盤を考察している。すなわち，専売公署は当初北満阿片の買収を試みたが，熱河作戦後は熱河で罌粟栽培を奨励する一方，治安対策から北満の罌粟栽培が潰滅していく過程を考察している。

第十章では，1935年度から阿片専売が軌道に乗り，1936年度に大幅な専売益金を計上するが，1937年に日中戦争が勃発して，阿片専売がしだいに齟齬をきたす見通しが示される。同年満州国は阿片煙膏のみならず，麻薬（モルヒネ・ヘロイン）にも専売制の施行範囲を拡大しようと企図した。この時，麻薬の害毒の拡大を懸念した中国人大官の反対に表面的に配慮しながら，実際には専売収益の増大を図る「阿片断禁方策要綱」が制定される経緯を解明している。

本書は，日中戦争勃発後の満州国阿片専売の見通しについて若干触れているが，これ以後日本敗戦までの考察は，将来に予定されている続編の課題として残されている。

本書は，新聞で報道された三線連絡運賃反対運動，関東庁阿片事件，モルヒネ密輸事件，在満機構改革等の大事件の「点」，および関東庁・満州国の阿片・モルヒネ・密輸関係の断片的な公開・非公開資料をつなぎ合わせ，「幾何学で言う補助線」を引き，関東庁・満州国の阿片専売の経緯，大連商人の密輸，在満居留民のモルヒネ・ヘロイン密売の経緯を縦軸に，1910年代から満州事変を挟む日中戦争初期までの日本の対満・対中国政策の展開過程の中から，「わが満蒙の特殊権益」の構造を抽出している。

著者がこの着想を得たのは，「狂的熱心と顕微鏡的精緻とを有する士」である野波静雄が戦前に発表した関東州の阿片専売・密貿易に関する調査報告書を発見したことによる。野波は生年も没年も分からない謎の人物である。著者は，野波の問題意識に啓示を得て，満州国成立後の阿片専売収益とモルヒネ密売，日本品密輸との関係を解明しており，さしずめ「現代の野波静雄」と評することができる。

本書は，基本的な分析の枠組みとして，関東州租借地・満鉄附属地・治外法権・領事館警察の特権に基づいて形成された「我が満蒙の特殊権益」を定式化している。すなわち，関東州の阿片専売，日本居留民（朝鮮人を含む）の阿片・麻薬密売，および大連自由港制度を利用した塩・雑貨の対中国密貿易による非合法な経済利益が特殊権益の実体を構成し，南京国民政府の全国統一過程で危機に晒された「わが満蒙の特殊権益」を守るため，日本居留民による利権擁護運動が盛り上がっていく過程を分析している。

満州事変前の「わが満蒙の特殊権益」の危機については，しばしば東北政権の反日政策（満鉄並行線建設，葫芦島築港，日貨排斥運動等）との関連が指摘されるが，具体的な利害関係が不明で，隔靴掻痒の感を免れない。本書は，1930年5月に日本が南京国民政府と新関税協定を締結してのち，治外法権撤廃交渉が始まると，在満居留民の四割弱をしめる零細商工業者（阿片・麻薬密売業者，密輸業者等）が不利益を被って，「わが満蒙の特殊権益」「わが生命線」の危機が生じ，満州事変の伏線となったことを示している。本書が

「わが満蒙の特殊権益」の危機の内実を具体的に明示したことは，大きな功績である。

本書は，もっぱら中華民国（南京国民政府）との矛盾という観点から「わが満蒙の特殊権益」の危機を考察しているが，張作霖時代の東北政権は独立王国であり，易幟後の張学良政権もなお高度自治を保持していた。東北政権の統治下における「わが満蒙の特殊権益」の位相が本書では不明確であり，張作霖爆殺事件を生み出した「わが満蒙の特殊権益」の危機が説明できていない。

「わが満蒙の特殊権益」の危機を，阿片密輸業者，麻薬（モルヒネ・ヘロイン）の密造・密売業者，関東州塩・日本雑貨の密貿易業者との関連で具体的に描き出したのは本書の功績である。しかし，在満居留邦人の六割強を占める満鉄職員，関東庁・領事館の官公吏，大会社の社員にとっての「わが満蒙の特殊権益」が何であったのかが明示的に示されておらず，不満が残る。さらに，大豆輸出業者・海運会社・大商社の利益，石炭・木材等の天然資源をめぐる利権，満鉄の鉄道権益等の「特殊権益」が考察されていない。著者にはさらに「わが満蒙の特殊権益」の全体像の再構築を期待したい。

関東庁の阿片専売が満州事変後に治外法権で守られた日本人・朝鮮人の「特殊権益」の源泉として存続し続け，これが満州国の阿片専売実施にとって大きな障害となる。1934年の満州国の機構改革は，関東庁と満州国の阿片専売の相剋に終止符を打ち，関東庁廃止，満鉄附属地の返還，治外法権の撤廃に帰結する。以上のパラドックスに満ちた関係を解明したことは本書の大きな功績である。

本書は，広義の阿片を構成する生阿片・阿片煙膏・麻薬（モルヒネ・ヘロイン）について，それぞれ生産・流通（輸出入）・消費のすべての領域に目配りをしながら，満蒙（および華北）における阿片，およびそこから派生する多面的な問題について論究しており，各論的に考察しても興味深いテーマについて示唆に富む見解を示している。

大連を中心とした在満邦人による密貿易の構造を時系列的に明らかにしたことは，本書のもう一つの功績である。たとえば，関東軍の華北分離工作について論じる際，冀東特殊貿易についてしばしば論究されるが，その歴史的経緯について詳しく論じたものは寡聞にして知らない。本書はその研究史上の空白を埋めたものと言える。

さらに，本書の論点は満州事変，熱河作戦，長城作戦における軍事問題にも波及し，1935年以降に本格化する華北分離工作の背景として，阿片・麻薬の軍による謀略取引について論究している。著者が日本軍の謀略特務工作の裏面史に通じていることが，本書の読み物としての興味を一層引き立たせている。

評者として具体的な論拠を挙げにくいが，資料の読み込みが強引で，歴史解釈の客観性に違和感を覚える箇所が散見される。これらの「山田節」は著者の「持ち味」で，本書の欠陥でもあり，また魅力でもある。

本書は表現が平易で，論旨も明快であり，興味深い内容が豊富に盛り込まれているが，文章が冗長で，全体を通読するにはかなりのエネルギーが要求される。読者の便宜という観点から見れば，余分な枝葉を取り払い，文章をさらに推敲して表現密度を高め，頁数をせめて半分位にしたほうが，インパクトがより大きくなったと思われる。

さらに注文を付ければ，近年中国の阿片問題について中国で次々に資料集が刊行されており，そのサーベイが必要である。著者は中国側の阿片禁止問題，天津の阿片密輸・麻薬密造にかなりの紙数を割いている。本書では利用されていないが，『天津大公報』には阿片・麻薬関係の記事がかなり多いので，参照する価値が高いと思われる。

（2002年12月刊，945ページ，15,000円＋税）